



審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2832 号	氏名	佐々木 優
審査担当者	主査	子路 智恵	(印)
	副主査	鹿毛 政義	
	副主査	矢野 博久	
主論文題目： Evaluation of Endoscopic Transpapillary Brushing Cytology for the Diagnosis of Bile Duct Cancer Based on the Histopathologic Findings (胆管癌における内視鏡的胆管ブラシ擦過細胞診の検討：摘出病理との比較検討を含めて)			

審査結果の要旨 (意見)

悪性胆道狭窄における病理診断は治療方針の決定に必要な不可欠なものである。本論文は細胞診における診断成功率の向上のために必要な状況を明らかにしている。現在の医療水準においては胆汁吸引細胞診、ブラシ先端の細胞診、ブラッシング後胆汁細胞診の三者を組み合わせることでの成績も現時点における良好なものではあるが、限界があることを示している。特に最も頻度が高いにもかかわらず、flat type の診断率が低いことは著者らも示すように大きな問題点である。このことは今後さらなる成績向上に向けての seed を植え付けたとも言えよう。安全で効率の良い検査法を確立してもらいたい。学位論文としてふさわしいと考える。

一方、放射線を用いる本法は患者および術者の被ばくの点においても十分な安全対策が必要であり、その点の本論文において検討されていないのは残念であり、今後の検討が必要である。

論文要旨

悪性胆道狭窄に対する ERCP-guided brushing cytology の診断能は 35-71.6%と報告されており、決して高い診断能ではない。胆管癌に対する ERCP-guided brushing cytology の成績を検討し、切除例の摘出病理標本と対比させ本方法の問題点を検討した。患者および方法は、2008 年から 2012 年 8 月までに胆管癌に対しての ERCP 下胆汁細胞診を行った 76 例を対象とした。胆汁細胞診の採取方法は、胆汁吸引細胞診(BAC)、ブラシ先端の細胞診(BTC)、とブラシ後胆汁細胞診(PBC)の 3 パターンを行ない、診断能を検討した。また、切除例における肉眼型や浸潤様式別の診断能を検討した。結果は、全体の癌陽性率は 67.1%(BAC 単独で 41.9%)であり、BAC のほかに、BTC と PBC を併用することにより癌陽性率の統計的に有意な増加(P=0.0031)をもたらした。34 切除例での肉眼型との関係での癌陽性率は、BTC と PBC の併用と BAC 単独と比較すると papillary type で(87.5 vs. 40.0 %, p = 0.071)、nodular type で(100 vs. 70.0 %, p = 0.0603)、flat type で(62.5 vs. 57.1 %, p = 0.7651)であった。胆管癌に対する ERCP-guided brushing cytology は、brushing 後の胆汁細胞診を加えることで診断能の向上が得られる。しかし flat type 示す症例では癌陽性率が最も悪かった。胆管癌の病理組織学的特性を熟知したうえで、胆管細胞診の結果を判読することも重要である。